

2019年5月5日（日）「今日か、明日か」

マタイ 23:37-39

37 ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。38 見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。39 あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」

【序論】

いよいよ23章を終えようとしています。私たち読者にとりまして一つの区切りと言えるでしょう。23章は「災い」の章、ユダヤ教の指導者たちに向けて語られた「七つの災い」のメッセージを学んできました。主イエスはその後、エルサレム神殿を出て行かれます(24:1)。そして、もうそこに戻ることはありません。何か、神の栄光が去るようなイメージがある。ですから、今日の箇所は最後通告のような響きを持っているのです。私たちにも「言ってくれているうちはまだよかった」という経験があるのではないのでしょうか。言われなくなって、「やっと静かになったか」と安堵する人もいるかも知れません。私などは、言われて辛いこともあります。何も言われなくなるのは尚のこと怖いのです。誰も何も言ってくれない状況というのは、ある意味で危険なことでしょう。人間は歳を重ね、上の立場になればなるほど、人からの忠告を受けにくくなるのです。あるいは、言われても耳を傾けなければ、周りは黙ってしまうでしょう。これは夫婦や親子の関係においても起こり得ることです。ユダヤ教の指導者たちは心して主のことばを聞かなければなりません。そして、私たち読者も耳を澄ませて、自分への神の語りかけを聞く必要があるのです。

【本論】

本論1. 度重なる主の呼びかけ

ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。(23:37a)

原文には「ああ」という言葉はありませんが、「嘆きの歌」にふさわしい書き出しです。

「エルサレム」は基本的にイスラエルの中心、ユダヤ宗教の中心を表します。主はイスラエル全体に向けて、その代表者に対して語っておられる。更に言うならば、「エルサレム」とは私たちの心の中心と言ってもよいでしょう。読者の人格全体への語りかけとしても聞こえてくる。主イエスは第一に神の民の救いのために来られました。「エルサレム、エルサレム」との呼びかけは、ご自分の民を愛する神の心の表れです。主はどんな調子でこれを語られたのか。読者はエルサレムのために哀歌を歌う主の心をよく読み取らなくてはなりません。旧約聖書では、神とイスラエルの関係が夫婦に譬えられている。つまり、神は夫として妻に語りかけているのです。主イエスは主なる神ご自身として、妻なるイスラエルを愛し、愛への応答を求めておられます。

愛に応えてほしい。これは、すべての夫婦関係における相互の自然な願いではないでしょうか。しかし、この地上にあつては小さなすれ違いから夫婦の関係に溝ができてしまうことがある。そして、それを放っておくと、いつしかほころびが広がっているかも知れません。その多くは、相手の言葉に耳を傾けないことに起因しています。人間同士においては、どちらか片方だけに責任があるということは少ないでしょう。しかし、神と民の関係においてはそうではない。神は忠実／誠実／真実なる神であり、罪を犯すことはなく、相手を一方的に愛し、契約を守り続けるお方です。そして、イスラエルが背いた時には、その関係をどうにか立て直そうと、繰り返し語りかけ、ご自身に立ち返ることを求め給いました。その「神のことば」が「預言者」です。神は預言者を通してイスラエルに語り、その罪を示し、悔い改めを迫りました。イスラエルは霊的姦淫（偶像礼拝）を犯していたからです。神にとって、イスラエルが偶像に心を傾けることは、私たちが配偶者に姦淫を犯されるほど、辛く、苦しく、赦しがたい出来事だったのです。

イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。彼らは、呼べば呼ぶほどますます離れて行き、もろもろのバアルにいけにえを献げて、刻んだ像に犠牲を供えた。（ホセア11:1-2）

「呼べば呼ぶほどますます離れて行く」という表現がありますが、離れて行く者を尚も呼び続けることは、私たち人間にはできないことでしょう。私たちは相手が応えてくれなければ、「そっちがその気なら」とか「勝手にしろ」とか「あいつには何を言っても無駄だ」と、愛し続けることは困難なのです。しかし、神は語り続ける。そして、その声はだんだんと厳しくなる。審きの宣告に至る。「あなたがたを捨て去る」とまで言われる。しかし、その言葉の裏には変わらぬイスラエルへの愛があるのです。そこまで言わなくては、相手は気づかない。気づかせるための限界的メッセージなのです。

そのような神の御心にイスラエルは気づかなかった。彼らは神から派遣された預言者

を次々と殺し、石で打ち、「神のことば」を葬り去ったのです。これは何も遠い昔の外国の話ではありません。私たちの心に問いかけるメッセージです。「あなたは神のことばを無視してはこなかったか」。私たちが誰かとの和解を拒んでいるとき、「このままでいいのか」という微かな警鐘が心に響いてきます。その声を聞かぬふりをし、問題を先送りにしているとき、私たちは神のことばを葬り去っていることにならないでしょうか。

「エルサレム」は、個々の人間の心だけでなく、共同体の霊的状态を表しているとも言えます。東伏見福音キリスト教会の霊の中心、その教会を形成する私たちの人格の中心であります。この群は聖い群であるか。重大な罪を隠したままにしてはいないだろうか。まことの羊飼いの声を聞いているだろうか。一人の聖徒の罪が共同体全体に影響を及ぼすことを、私たちは忘れてはいけません。

本論 2. 最後の通告

わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。(23:37b)

「めんどりがひなを翼の下に集める」というのは面白い表現です。読者のイメージ、あるいは視覚に訴える譬えです。母鳥の大きな翼に覆われている小さな雛鳥、それが神にかくまわれているイスラエルの姿なのです。これは旧約聖書の様々な箇所が登場するイメージです(申命 32:11、ルツ 2:12、詩篇 36:7、63:7、イザヤ 31:5)。神はイスラエルにとって夫であり、父でもあり、母でもある。完全な父性と母性を具えた神。時に厳しく訓練し、時にやさしく包み、慰める。愛において完全なバランスを具えたお方なのです。主イエスは「わたしは…集める」と言われます。「私こそあなたがたを愛する神なのだ」「なぜ私の呼びかけに応じてくれないのか」「ずっとあなたがたを見守ってきたではないか」「どうして私を認識できないのか」と。「集める」とは、ご自分の民を群として形成することです。しかし、神の民は主イエスを神と認めることにおいて一致しなかった。民の意識はバラバラであった。

見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。(23:38)

「あなたがたの家」とは神殿を指します。建物としての神殿は、神の臨在を象徴していました。この建物さえあれば、神はイスラエルの中心におられると民は考えていた。しかし、いつの時代にあっても、神殿を拠り所としながら、宗教そのものが堕落するという現象が起きます。ソロモンの「第一神殿」は壮麗でしたが、神の栄光が去り、バビロンによって破壊されました。ゼルバベルによって再建された「第二神殿」は、ヘロデ大王によって拡張工事がなされましたが、この神殿礼拝も堕落していました。主がここで

予告された神殿の崩落は、紀元 70 年のローマ軍によるエルサレム破壊によって現実となります。この神殿もまた神の栄光を失っていました（エレミヤ 12:7、22:5、エゼキエル 10:18-19、11:22-23）。

私たちキリスト者は「神の神殿」と言われます。

あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。（I コリント 6:19-20／新改訳 2017）

神の栄光が我が内にある。私たちの体、即ちこの生き方、語る言葉、態度を通して、神の栄光が現されるのです。今一度、自分の生き方を問うてみたい。神のことばは聞こえているか。それに従っているか。従うことを後回しにしてはいないか。「明日にしよう」と言っていないか。

主イエスはイスラエルに最後の選択を迫っておられます。今のまま主を拒み続けるならば、その結果として神の審きが下ることになる。願わくはそうあってほしくはない。しかし、ここまで語りながら、主は知っておられたのです。彼らがついにはご自分を十字架に架けるということを。自分の命運を知りながらも尚、真理を語り続ける。これが預言者の厳しい使命であります。

あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。」（23:39）

主イエスはここで、詩篇 118:26 を引用しておられます。実は、この言葉は既に 21:9 で出てきていました。主イエスがエルサレムに入城された時、群衆はこの言葉をもって主を迎えたのです。しかし、その歓呼の声は止み、やがて「十字架につけろ」という叫びに置き換えられていきます。主イエスが誰の目にも神であることが認められるのは、再臨の時です。

見よ、彼は、雲に乗ってこられる。すべての人の目、ことに、彼を刺しとおした者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。しかし、アメン。（黙示録1:7）

神の民が自分たちの救い主を見出せなくなる。誰が真のメシヤなのかが分からなくなってしまう。そういう暗黒の時代がイスラエルに訪れるというのです。主はご自分を一時の光として世に示されました（ヨハネ 9:5）。主イエスを受け入れる日は先延ばしにしてはいけません。今がその時なのだ。主は最終的なメッセージとして、このことを語られたのでした。

【結論】

私たちにも神のことばが語りかけられています。既に主イエスを信じている人には、その人生において一回的な方向転換があったはずです。私たちは決定的に人生の向きを神に向け直したのです。そして、私たち自身が神の神殿となりました。そこから日々聞こえてくる神のことばがあります。私たちを福音に生かそうとする聖霊の促しです。その細き御声を注意深く聞き取らなくてはなりません。そして、その声に従うことを先延ばしにしないようにしましょう。声を消し続けるならば、それはいつしか聞こえなくなってしまうです。神はなぜ私たちに語られるか。それは、まことの平和を得させるためです。神との平和、人との平和を実現するために、神は常に語っておられるのです。

【祈り】

だれでも、聞くには早く、語るにはおそく、怒るにはおそいようにしなさい。(ヤコブ 1:19)
主よ、この御言葉は真理であると分かっているながら、私たちは何と「聞くに遅く、語るに早く、怒るに早い」者でしょうか。「聞く」とは、ただ聞いて終わりのことではなく、「行なう」ことも含まれているでしょう。どうぞ私たちが、正しいことを行なうのを先延ばしにして生きることがないようにお助けください。実行に移すべき日は今日なのかも知れません。福音に生きる力をお与えください。私たちをあなたの御住まいにふさわしく造り変えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

「エルサレム」をご自身の住まいとし、イスラエルと共に居ることを願い給うた、父なる神の愛。

形骸化した神殿に代わり、自らのからだを「神の宮」となし給うた、主イエス・キリストの恵み。

信者をご自分の住まいとし、福音に生きる力を与え給う、聖霊の親しき交わりが、我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。